



明

治時代の松江を舞台にしたNHK朝の連続テレビ小説『ばけはけ』放送のおかげで、松江城のお堀端にある『小泉八雲記念館』や『小泉八雲旧居』周辺は休日ともなれば警備員さんが出動するほどの大賑わいを見せています。

元々この塩縄手と呼ばれるお堀沿いの通りは江戸時代の面影を今に伝える一帯で昔から松江の観光名所ではありましたが、それでも小泉八雲ゆかりの施設に順番待ちの入場制限がかかるなど聞いたことありませんでした。流石、聞きしに勝る朝ドラのインパクト恐るべしといったところでしょうか。

私は小学校三、四年生のとき、この近くの小学校に通っていたので小泉八雲のことは「その昔、お堀の近くにラフカディオ・ハーンという偉い外国人の先生が住んでいた」と、何をした人かよく分からないままヘルン先生という愛称とセットで刷り込まれて育ってきました。(因みに「小泉八雲」と「ラフカディオ・ハーン」と「ヘルン先生」というのは同一人物です)なのでヘルン先生のこと何だか知ったような気分のまま時は流れ流れて、今頃になってあれこれ勉強する有様です。

この松江城周辺から京店商店街あたりにはヘルン先生にまつわる記念碑的な物体があちこち見受けら

れますが、中でも秀逸？なのが京店カラコロ広場にあるレリーフでしょう。この壁に帽子を被り両手に旅行鞆を提げた寅さんみたいなおじさんが後ろ姿ではまり込んでいるのですが、これがヘルン先生なんです。

さて、前置きはこの辺にしてここからが本題です。ばけはけ効果で観光客が増えて地元の商業関係が潤うのは有り難いことですが、地元民として個人的に困惑していることがあります。それは蕎麦が気軽に食えなくなったことです。

拙宅から徒歩圏内にある石橋町の『きがる』という蕎麦屋に妻とよく通っていたのですが、ここ最近いつ何んでも大行列。ばけはけ前は12時まで行けばギリギリ待たずに入れたのですが、今では14時ごろでも10人以上の待ち客が店の前に並んでいます。木、金、土曜日は夕方からも営業していて、普段は夜の客入りは昼と比べれば少なかったのですが、土曜夜に行ってみたらこれまた満席。

こうなると余計にきがるの蕎麦が意地でも食べたくなるのが人情というものです。週末は多いから木曜の夕方早めに行ったらいいかもと妻と勇んで行ったら一席だけ空いていて漸くきがるの蕎麦にありつくことができました。うらめしや。

老い老いに

木幡智恵美

61

二

〇〇五年の夕焼け通信は、今も書き続けて下さっているN・Rさん、M・Iさんのほか、Y氏が「かきこじぞうを演じる」の連載を始め、S・Oさんの「療養日記」が掲載された。そして、K・Aさん、T・Hさん、M・Aさんからは時折詩が送られてきた。海外事情はK・TさんからのSWEDEN REPORT。時に六ページになることもあるが、ほぼ四ページという現在のスタイルで続いている。

この年が創刊十三年目、さらにその後二十年の月日を重ねているのだが、この「続ける」ということが、私を苦境から救ってくれた。

夫の二度目の大病で、早期退職を本気で考えるようになったのだが、実はその何年か前から辞めることが頭にちらついていた。仕事が負担になってきたのだ。年齢的にはもうベテランの域に達しているのに、尊敬する先輩方のようににはできない。バリバリ仕事をこなす後輩たちに気後れしてしまう。失敗すると、それが気になって前に進めない。ヒヤリハットがあつた翌朝など、動悸が治まらず、職場に向かう足が鈍る。後で娘に聞いたのだが、その頃は端から見ても様子がおかしかったようで、夫に「お母さんの力になってやって」と言われていたのだそうだ。

そんな私が辛うじて自分を保ちえたのは、第一には家族の支えがあつたからだだが、「続ける」ものがあつたからだと思う。合気道の稽古で身体を動かすことが発散になり、夕焼け通信が気持ちを支えてくれた。「毎週書く」という使命のようなものが、自分を奮い立たせてくれたのだ。これまで書き続けてきたからには書き続けよう。

その後、職場が変わり、新しい風に吹かれて少しずつ気持ち前向きになったけれど、早期退職の気持ちは夫の病気を機に現実味を帯びたものとなった。あの不安定状態は更年期障害によるものだったのかもしれない。もし、そうだったとしたら、これから更年期を迎える人に言いたい。何か続けるものがあると、人は苦境を乗り越えられると。

私には「夕焼け通信」は恩人(恩紙?)のようなものだ。今、老齢に達し、身体は弱り、気持ちも萎えていくけれども、ここに書き続けることで、残された日々を確かに歩いて行ける気がする。

30代フリーター Xの保守的、右派的なアカウントの自己紹介でよく見るひと言は「日本が好き」だ。戦前・戦中の日本でも、ここまで「愛国心」をむき出しにする日本人はそういなかったのではないか。「好き」とか「愛している」という言葉を軽々と口にするのははしたないと当時は考えられていたはずだからだ。

年金生活者 愛とは愛されたいと望むことだというサルトルの考えに従えば、愛国者たちは日本に愛されたいと願っていることになる。そんな願いが膨らむのは、自分は日本に愛されていないという飢餓感があるからだ。それは日本への憎しみを生む。フロイトにならって言えば、愛と憎しみは表裏一体であり、日本への愛と憎しみもまた同様だ。

30代 彼らはなぜ日本を憎むようになったんだ。

年金 「格差」がその答えのひとつだ。かつて等しく貧しかった大多数の国民は、高度経済成長の時代を経て貧

困から脱した。だが、脱し方の度合い、豊かさの度合いには差がある。それによって格差が際立つようになった。パイは大きくなったはずなのに、自分の分け前が少ないのはなぜだ、と不満を募らせる人びとが当然ながら出現し、その中から国を憎む人たちも出始めた。

国家を、統治機構を指す「ステート」と、文化的・民族的な共同体を指す「ネーション」に分ける考え方をとれば、愛国者たちが憎むのはステートのほうだ。富の再分配を担うのはステートであり、それが不公平な分配をしているという不満が憎しみを生む。

ステートは富豪や高級官僚などエリートに乗っ取られている。そのせいであなた方は不遇な目に遭い、あなた方の愛する偉大なネーションが損なわれている。そう訴える政治リーダーに感化されたのが愛国者たちということが出来る。トランプに代表されるそんなリーダーの声を聞いて、彼らはステートへの憎しみをバネにネーション

への愛を募らせる。
30代 そうした愛国者たちの出現の背景には何があるんだ。

年金 前にも引用したマルクスの次のような指摘がそれを知る手がかりになる。《政治的国家が真に成熟をとげたところでは、人間は、ただたんに思想や意識においてばかりでなく、現実において、生活において、天上と地上との二重の生活を営む。天上の生活とは政治的共同体における生活であって、そのなかで人間は自分を共同的存在と考えている。地上の生活とは市民社会における生活であって、そのなかでは人間は私人として活動し、他の人間を手段とみなし、自分自身をも手段にまでおとしめ、疎遠な諸力の遊び道具となっている。》（「ユダヤ人問題によせて」城塚登訳）

市民社会にあつて「私人として」孤立し、「疎遠な諸力の遊び道具となっている」人間の姿を、資本に翻弄される当時の工場労働者に見ることが出来る。そうした「地上の生活」、市民社

会での生活の過酷さを幻想の中で克服するのが「天上の生活」、国家での生活だ。そこでは、市民社会で孤立していた労働者も「自分を共同的存在と考える」ことができる。彼らはその「幻想」によって過酷な労働と低賃金に耐え、産業資本主義の発展を支えた。それが高度経済成長をもたらし、労働者階級を貧困から脱出させた。

他方で、等しく貧しかった労働者がそうでなくなったことで、格差が広がり出した。それを縮小するため、国家は再分配機能を強化した。だが、「地上の生活」の格差の拡大に追いつくことはできない。幻想の中で「孤立」を克服することができた「天上の生活」は、「格差」を同じようには克服することができない。自分たちは不公平に扱われていると不満を募らせた人びとは、それに代わる新たな「天上の生活」、言い換えれば新たな「幻想」を求めるようになった。

それをひと言でいうなら、国家による「愛」だ。大きな「愛」によって自

ニュース日記 995
中村 礼治

愛国者たち

分たちを正当に処遇してほしい。自分たちに敬意を払ってほしい。それを妨げるものがあれば、壊してほしい。愛とは愛されたいと望むことだというサルトルの考えは、愛されたいと望むことは愛することでもあると言い換えることができる。国家に愛を求めることは国家を愛することでもある。こうして愛国者たちの一群が生まれた。
30代 愛国者たちは、個人の自由より国家への忠誠を重んじ、平等よりも分をわきまえることを強調し、助け合いよりも自己責任を求める。
年金 「愛」はもともと不自由で、不平等で、特定の相手だけを助けるものだからだ。愛されたいと望むことは相手に心も体も抱きしめられたいと願うことだ。つまり拘束されたいという願望だ。愛はほつたらかされることを嫌う。つまり「自由」を嫌う。
愛はその対象を限定する。相手を厳格に選別し、それ以外は排除しようとする。人を「平等」に扱うことは、だれも愛さないこと、だれからも愛されないことに等しい。
愛は愛する相手だけを助けようとする。みなが互いに助け合う「友愛」は「愛」の1字が入っていても愛とはみなされない。愛国者たちは、近代国家の基本理念となったフランス革命のスローガン「自由・平等・友愛」をことごとく否定する。